

ブレース・サンドラール小伝(7)

加 太 宏 邦

サンドラールの娘、ミリアムさんからの回答によれば、「エレヌ」に関する記述は次の4つを典拠としているという。

- ① 「若いときの手帳」
- ② 「サンドラール文庫に保存されている資料」
- ③ 「オーギュスト・シュテルに宛てたいくつかの書簡」
- ④ 「母から伝えられた資料、口伝えに教えてもらった思い出話し」

ということになる。

一方、ミリアムさんの『サンドラール』にある「エレヌ」に関する記述を整理すると次のようになる。

- a 氏名:エレヌ・クラインマン
- b 住所:サンクト=ペテルブルク市エンドウ豆通り79番地
- c 国籍:ロシア人
- d 年齢:19歳になったばかり。
- e 家庭:父と息子(複数)で時計製作所を経営者している。ルーバ(サンドラールが店員として働いていた時計・宝飾店)へ卸している。家族の数は多い。彼女は末っ子。
- f 人柄:優しく物憂げでふっくらした顔つき。小声で喋る。ややハスキー。フレディの言うことを傾聴する。
- g エレヌはうつらうつらしたまま、灯を消そうとして、石油ランプを引っくり返してしてしまったらしい。ベッドに火が燃え移り、それはエレヌに及んだ。エレヌは燃えた。生きたまま燃え、燃えて死んだ。

さて、上の①から④の資料と対応させながら、エレヌに関する事実 a-g が導きだされるのかどうか検証してみよう。

- a 氏名:エレヌ・クラインマン

b 住所：サンクト＝ペテルブルク市エンドウ豆通り 79 番地

c 国籍：ロシア人

③に次のような文面が見られる。

「次の住所あてに便りをもらえればうれしいのだが。サンクト＝ペテルブルク、エンドウマメ通り 79 番地、クラインマン商店気付、ソゼー(サンドラールの本名)宛」

「急いで手紙を下さい。住所は以前のままです。サンクト＝ペテルブルク、エンドウマメ通り 79 番地、クラインマン夫人気付」

これは、サンドラールが二回目のロシア訪問をしたときにオーギュスト・シュテルに宛てた手紙の中の記述である。

エンドウマメ通り (rue aux Pois) というのはロシア語で「ゴロホバツヤ通り」(現在のサヴウシュキン通り)で、彼が郵便の受け取り先に指定していたアドレスであり、そこがクラインマン一家だと分かる。しかし、分かるのはこれだけで、この苗字やアドレスが「エレヌ」と結びつく確証をここから導き出すのは無理であろう。おそらく、ミリアムさんは、サンドラールが二度目のロシア滞在で、ルーバ家を郵便の宛先にせず、クラインマン家にしたことで、そう推測しただけではないだろうか。しかし、この推測にはやや問題があると思われる。彼がそんなに、エレヌに執着していたのなら、死後 4 年も経って、やっと再訪していること自体がちょっと不自然なのである。

さらに、この一家が「ロシア人家族」だという証拠もここから見出せない。確かなのは、彼らが、ロシアの帝都で生活をしているというだけである。そもそもこの苗字 Kleinmann はあきらかにゲルマン的で、連載第 5 回目で述べたように、当時のロシアには、二百万人以上のドイツ人やスイス人が居住し、コロニーを形成していた。サンドラールのルーバ時計・宝飾店への就職は、ヌシャテルの町のエミール・ユリジェ先生の斡旋によるもので、このルーバさんは、まちがいなくヌシャテル州出身のスイス人であった(『スイス歴史・人名辞典』にもヌシャテル州ビュット町に特徴的な苗字で、この家系はアメリカ移民などで別れていった、とある)。このルーバ時計店と取引関係にあったらうと想像されるクラインマン商店も、スイス人だと考えるほうが自然である。時計というのは、スイス人のもっとも得意とするなりわいだし、時計と言えはなによりヌシャテル州、そう考え

れば、同州出身のサンドラールの就職のきっかけや人的関係もじつに簡単に理解できる。

ついでに言うと、エレーヌ Hélène という名前も、完全にフランス語である。もちろんロシア名エレナ、ドイツ語名ヘレーネをフランス語綴りにして、そう呼んでいたかもしれない。ただ、「本当に」ロシア人なら、彼の、彼女にあてた手紙が、完全なフランス語であるのは、やや不自然である。当時、かれはすでに片言のロシア語ができたのである。百歩譲って、ドイツ語家族(ドイツ人かドイツ語圏スイス人)だとすれば、サンドラールは、ドイツ語なら、ほぼ完全に出来たのである。かれは、そもそも、独仏の通訳・翻訳の仕事のために雇われたのだから。わざわざフランス語で手紙を書く必要はない。

d 年齢:19歳になったばかり。

e 家庭:父と息子(複数)で時計製作所を営業者している。ルーバ(サンドラールが店員として働いていた宝飾店)へ卸している。家族の数は多い。彼女は末っ子。

年齢や家庭環境についても、どの資料にも記述がない。ただ、クライマン家が時計関係の職である可能性は極めて高いのは、先にあげたような理由による。それはいいが、しかし、何度も言うが、そうだとすると、この一家と「エレーヌ」を結び付けるものはない。

ここに「父」が記述されているが、先程のシュテル宛の2通目の手紙には「夫人」を宛名にしているところからみて、もしかして、この家庭には父はいなかったと考えるのが普通だろう。そうすると、ミリアムさんのいう家族構成はあやしくなる。

エレーヌの年齢を19歳というのは、おそらく、サンドラールと同一年に設定しただけのことではないだろうか。かれも1907年6月(エレーヌが死んだ時点)で19歳だったのだ。いわば同一年の初恋という物語かもしれない。家族の数が多いか、その他の「事実」は、たぶん、後年の小説『モガンニ・ナメ』(1922年)の中のいくつかの記述からの類推であろう。ミリアムさんは、ぼく宛ての手紙で、この小説を典拠にあげてはいない。ところが、『サンドラール』の中では、彼のロシア再訪を記述するにあたってしばしば、この小説から引用している。そのなかで、クライマン一家とおほしき家庭への再訪の場面があって、そこの家族は大人数らしいことをうかがわせる。また、エレーヌの「事故」を照会する手紙に「あなた

の兄弟frèreからの葉書を受け取った」とある。この場合、frèreは兄と考えるほうが自然だから、逆に言えば、彼女は少なくとも妹となる、という程度の類推ではないだろうか。

f 人柄:優しく物憂げでぼちゃっとした顔つき。ややハスキーな小声で囁く。フレディの言うことをじっと聴いている。

この根拠はどこにも見出せない。ただ、なんとなく薄幸なロシアの少女というイメージの紋切り型描写でしかないような気がする。ほくたちの知るかぎりでは、彼女からの発信や、彼女の写真などの記録は一切ない。そのことは、ある種の「影の薄さ」「おとなしさ」を無意識に連想させてしまわないか。あるいは、ミリアムさんが懐く、産みの親フェラのイメージと重ね合わせているのかもしれない。現存するフェラの写真はどれも憂いを含んだ表情をしている。

g エレーヌはうつらうつらしたまま、灯を消そうとして、石油ランプを引っくり返してしてしまったらしい。ベッドに火が燃え移り、それはエレーヌに及んだ。エレーヌは燃えた。生きたまま燃え、燃えて死んだ。

この記述は「らしい」という表現でなされているが、この推測は、火災の原因部分の文章にのみかかっている、「燃えて死んだ」という部分にはかかっている。原因の部分には想像の域をでてないことはミリアムさんも認めているのである。では火傷で死んだという部分はどうなのだろう。ミリアムさんが、彼女の死について、始めて言及しているのは『未公開秘録』の解説においてである。それによると「突然思い出したことがある。フェラが、フレディの初恋について私に話してくれているときに、エレーヌは火傷で死んだ、と言ったことだ。これはレモヌからも確認をしたことである」となる。

いままで、なんども確認をしてきたことだが、サンドラールは、自分の生涯についてほとんど何一つ「真実」など語らなかった人間だということである。彼が妻をはじめ周りの人々にいかに多くの作り話しをしたか。それをまともにとり扱った文学史家がいかにでたらめなサンドラールの伝記を書いてきたか。第一回で指摘したように、文学史におけるサンドラールはその出生地からしてすでにでたらめだったのだ。まさか、中世の文人じゃあるまいし、戸籍を取り寄せれば分かることだ。

ほくが、疑うのは、この種の「伝聞」である。エレーヌが「火災で死んだ」と

いうことは、サンドラールを「信じ」たときにのみ可能であって、そのことをもし、前提にしてしまえば、彼はパリ生まれだし、母親はスコットランド人だし、エジプトや中国やベルシャへ冒険旅行をしているし、いかさま商品の店員だったことになる。別にぼくが作文しているのではなく、ちゃんとあの権威あるガリマール社の「サンドラール詩集」にある彼の生涯の紹介をそのまま訳しただけである。言いたいことは、ミリアムさんがいう「母から口伝えに教えてもらった思い出話し」というのは、資料価値におおきな疑問符をつけておきたいということである。

そうすると、一体何が「エレーヌ」の正体を明かしてくれているだろう。もう一度確認してみよう。

- ① 「若いときの手帳」
- ② 「サンドラール文庫に保存されている資料」
- ③ 「オーギュスト・シュテルに宛てたいくつかの書簡」
- ④ 「母から伝えられた資料、口伝えに教えてもらった思い出話し」

①の「若いときの手帳」は当然『黒い手帳』などを指し、これらはすべて『未公開秘録』Inédits secrets に採録されている。つまり、この資料については、ミリアムさんとぼくとは共通の情報を有しているといえる。この内容で知ることのできる情報は、サンドラールのエレーヌ宛ての手紙の下書きである。この下書きこそが、エレーヌの存在を示す唯一の証拠なのである。ただし、ぼくには、ある疑念がある。そのことは、あとで述べる。

②の「サンドラール文庫に保存されている資料」というのは、ベルンの国立図書館内にある同文庫を指す。この資料は、1987年の秋に同図書館で展示公開が行われた。それはぼくも見に行った。このときに、すでに「エレーヌ」のことが念頭にあったぼくは、かなり注意をして見た。しかしその中には、どう考えてもエレーヌの身辺情報に結びつくものは無かったはずだ。ぼくの見落としがなかったとは言えない。しかし、それなら、リシャルルさん自身が、のちほどのぼくの問い合わせにたいして「自分にも分からない」と返答してきているのはどう説明すればよいのか。リシャルルさんは、この展示会の資料調査の責任者で、かつカタログの著者なのである。

ミリアムさんが、展示資料を意図的に「出し惜しみ」したのだろうか。しかし、彼女の著書から分かるように、彼女は記述内容に少しでも根拠がある場合は、ど

んな些細なものでも呈示してくれているし、またサンドラール文庫設立にもっとも熱心だった彼女の献身的な協力ぶりからも、まず考えられないことである。

では、彼女は、どうしてこれも根拠資料のひとつにあげたのであろうか。もう一度、当時の展示会カタログを見てみると、その30番に「エレヌ宛ての1907年5月6/19日書簡の抜粋」というのがある。しかしこれは『黒い手帳』からの拡大コピーである。新資料ではないから問題にならない。

また、35番に「パリ。1910年クリスマス」という日付のある校正稿(3枚)がある。これは「ノスタルジア・Nostalgie」というタイトルの詩で、後に(1912年)彼が積極的に関与していたささやかな同人誌「新しい人間」Hommes Nouveauxに掲載された(ただし全集にも詩集にも採録されていない)。カタログの解説をよく読むと、実は、この詩はエレヌに捧げられたものだと書いてある。少なくとも、リシャールさんは、そうカタログで説明している。しかし、ぼくは、当時、現物を見たときに、その校正稿にこの献辞があったのかどうかの記憶が、はっきりしていない。これはぜひ確認をしておく必要があると思い、ベルンの国立図書館の「スイス文学資料館」へ照会をした。マリユス・ミショー氏から返事とともに、校正稿のコピーが送られてきた。

こう説明がしてあった。「献辞部分を注意深くご覧になってお分かりのように、この「ノスタルジア」という詩は、当初、エレヌ宛になっていましたが、1912年に出版されたときにはスタニスラウ・プリビスゼウスキー宛になりました。リシャール氏のカタログでは、この点を明記しておりませんでした」。コピーを見ると、なるほど、「エレヌ」の文字のあったとおぼしきあたりは真っ黒に消してあって、全く見えない。もう一枚(おそらく、始めにやりかけて、途中でやめたものらしい)では、かろうじて、エレヌが見える(と言っても、そういう予断をもって見るから見えるという程度で、ハッキリ確認できるのはHだけである。)。いずれも消したその上に大きく A Stanislaw Prybyszewski と自筆で書きなぐってある。やや、奇妙なことだが、1910年クリスマス時点で「エレヌ」の献辞があったとしても、じつは、プリビスゼウスキーとサンドラールの縁は、それより早かった。サンドラールは、プリビスゼウスキーの『死者のミサ』というドイツ語の作品を同年の夏から秋にかけて仏語訳しているのである。その名前が、二年後の出版時に復活したのか、それとも、印刷の直前に「エレヌ」を入れて、やはり「プリ

ビスゼウスキー」に戻したのだろうか。

いずれにしても、ぼくの言いたいことを端的に言うなら、サンドラールの全作品、手稿、校正稿などでエレヌを特定するような記述(あの『黒い手帳』以外には)見当たらないのである。たしかに、エレヌという名前は『雷にうたれた男』にあるが、それはただ「死者エレヌ」とあるだけで、それにまつわるどんな記述もない。

③「オーギュスト・シュテルに宛てたいくつかの書簡」が、正確にどれとどれをさすかは分からないが、少なくとも、その全ては『未公開秘録』に掲載されているはずだ。そのことはミリアムさんも「フレディ[サンドラール]が1911年4月または5月から1915年までにシュテルに宛てた手紙がいくつか発見された」として、採録してくれている。シュテルはスイスのバーゼル・シュタット州出身の彫刻家で、1911年1月にパリでサンドラールと知り合いの仲になる。で、これらの手紙の中には、エレヌの名前も、それを匂わす記述も一切ない。おそらく、ミリアムさんがこれを資料にしたのは、あの「サンクト＝ペテルブルク、エンドウマメ通り79番地、クラインマン商店気付、ソゼー(サンドラールの本名)様」というアドレスを得るためだったとしかかんがえられない。

④の「母から伝えられた資料、口伝えに教えてもらった思い出話し」というものだが、資料は、当然「文庫」に入っているはずだ。それは、ミリアムさんが秘匿する理由が考えられないからであり、百歩譲って、「だれも知らない」資料を持っていて、それをもってエレヌについて記述をするとしたら、その典拠にあげないわけにはいかないことになる。どっちにころんでも、ミリアムさんは、典拠を明かさざるをえなくなっているはずだ。彼女の『サンドラール』で、しかし、エレヌについては、典拠として、この種のものがあげられていないのである。口伝えの思い出話しについては、資料として使うわけにはいかないことは先に述べた通りである。

こうやって、エレヌの証拠を一つ一つ検証すると、結局、たしかなのは、あの『黒い手帳』の記述だけになる。その内容をさらに詳しく検証してみよう。

(以下次号)